



中部のエネルギーを築いた人々

豊橋電気、岐阜電気、一宮電気などの経営に関わった
幡豆郡の資産家 **徳倉 六兵衛**

徳倉六兵衛(1865~1927)は、幡豆郡一色町の名望家で、県会議員、村長などの公職を務めるかたわら、地域で数々の事業を手掛け、さらに福沢桃介と協力して各地の電気事業の経営に関わった。徳倉は、慶応元年(1865)3月、豪農徳倉充芳の次男として旧千間村に生まれ、明治14年1月、17歳で家督を継ぎ、徳倉家の当主となった。少壮時より徳望があり、推されて村会議員、郡会議員(明治32年~36年)、さらに明治27年から40年までに計3回(5年7ヶ月)、県会議員を務めた。明治45年5月の衆議院選挙で政友会から出馬し、4500票余を得て当選したが、運動員が選挙違反に問われ、大正元年12月に失格、以降、政治的野心は放棄した。大正7年2月から9年5月(病气辞任)までの間は、第2代の一色村村長を務めている。



徳倉六兵衛顔写真
(『一色町誌』)

西尾銀行、平坂煉瓦、養鰻場経営など地元事業の展開

徳倉は幡豆郡きっての資産家として、様々な地元の事業に関わった。明治27年10月、西尾町に本店を置く西尾銀行が設立(頭取糟谷縫右衛門)されると、取締役に就任し(238株を有し第3位の株主)、大正7年明治銀行に合併されるまで務めた。幡豆貯蓄銀行(明

治29年設立)の取締役でもあった。

また、士族授産事業として、西尾町には明治15年西尾士族生産所(煉瓦製造)が設置された。同生産所が閉鎖された後、その技術を継承して、明治34年に平坂煉瓦製造株式会社が設立された。徳倉は、太田善四郎、稲垣小七郎らとともに参画し、その筆頭株主となっ



西尾銀行
(『愛知県幡豆郡案内』明治43年3月)



平坂煉瓦工場
(『愛知県幡豆郡案内』明治43年3月)

た。日露戦争ブーム時に同社の事業は発展したが、大正6年大阪窯業に合併された。

一色町は養蠶業で全国有数の産地である。同地域で初めて養蠶を手がけたのは、徳倉六兵衛とその甥徳倉広吉の両家であり、明治37年、一色町の生田竹生新田で12haの養蠶場を設けた。三河一帯は養蚕業が盛んで、餌となる蚕の蛹の確保が容易であったことが、発展の理由とされる。



徳倉養魚場

(『愛知県幡豆郡案内』明治43年3月)

豊橋電気の経営

徳倉は地元の事業だけでなく、日露戦争後、水力発電事業が拡大するなかで、多くの電気事業に投資し経営に関わった。当初、岡崎電灯と関わりを持ち「仲間入りをしたものの、意見の相違を惹起するに及んで之を弊履の如く打ち捨て」、豊橋電気へと転じた。豊橋では明治41年に第十五師団設置が決まり、市内にあった小規模な牟呂発電所(30kW)だけでは間に合わず、巴川を利用する見代発電所(360kW、明治41年)、下地火力発電所(150kW、明治42年)を建設するなど、事業の拡大をはかった。地元だけでは工事資金が調達できず、地域外から協力を求め、明治41年7月には、福沢桃介が乗りだし社長に就任した。さらに寒狭川に長篠発電所(750

kW、明治45年)が計画されたとき、徳倉も同事業に参画し、第4位の株主(1213株)として取締役就任した。長篠発電所は、国産初の縦軸水車を採用し、全国的に注目され、同社発展の契機となった発電所である。徳倉は、工事監督の責任者として、「半年の久しき間、工事場にて技師長と起伏を共にした」とされる。大正元年に建立された竣工記念碑の裏面には、工事関係者の筆頭に、「工事監督者、専務取締役 徳倉六兵衛」と記されている。



長篠発電所外観



長篠発電所竣工記念碑

岐阜電気、一宮電気の経営

徳倉は岐阜電気創設にも関わった。徳倉は、明治39年頃、岡崎電灯関係の田中功平、近藤重三郎、大岡正等と共に、岐阜地方での電力供給を目的として揖斐川支流粕川の水利使用を出願していた。当時岐阜電灯も水力化を目指しており、両者の争いを懸念した岐阜県知事島田剛太郎の懇諭で統合することとなり、明治40年1月、岐阜電気が設立（30万円）され、これに従来の岐阜電灯を合併し、社長には岐阜電灯社長の岡本太右衛門が就任、徳倉は第5位（347株）の株主として監査役に就任した。同社は、明治41年12月、粕川に小宮神発電所（350kW）を建設した。大正3年7月、岐阜電気では激しい料金値下げ運動に直面した。殺気だった群衆が岐阜電気に押し寄せたとき、社長等が会社から逃げ出す中、徳倉は前面に出て殺気立つ群衆のなかで代表と対応したとされる。



岐阜電気本社



岐阜電気小宮神発電所

徳倉は、また、一宮電気の事業にも関わった。同社は明治45年2月に、一宮町およびその周辺地域を供給区域として開業し、名古屋電灯の小木変電所から受電（600kW）して供給を行った。徳倉は、大正5年3月から、地元経営者に代わって社長に就任し、料金の値下げによる需要開拓など、経営改革を進めた。その一環で、徳倉が経営に関わっていた愛知電気工業（幡豆郡一色町に本店を置く電気化学工業）を合併している。

支那人	同	監査役	同	取締役	社長	一宮電気株式會社
志賀 定	八木 富三	徳倉 元治	福澤 駒吉	荒川 荒之丞	徳倉 六兵衛	中島郡一宮町 電話 三〇九
中島郡一宮町	中、車道八	幡豆郡一色村	東京府豊多摩郡 谷町	海部郡十四山村	幡豆郡一色村	

一宮電灯概要

〔日本国諸会社役員録 第25回〕商業興信所、昭和6年

一宮電気は大正9年5月、岐阜電気は10年2月、豊橋電気は10年4月、それぞれ福沢桃介の経営する名古屋電灯と合併した。徳倉は、福沢が社長を務める四国水力電気の役員となっている。徳倉の電気事業経営は福沢との関連の中で推進されたと見えよう。

活発な事業活動を続け、地元政財界に大きな影響と足跡を残した徳倉は、大正15年11月に引退し、後を嗣子充治に託した。徳倉充治は、第7・10代の一色町長を務めたほか、電気事業では矢作川で電源開発を進めた尾三電力の取締役になっている。六兵衛は趣味も豊かで謡曲、大弓などを嗜み、休日は釣りを楽しんだが、昭和2年12月、63歳で逝去した。

（浅野 伸一）